
けいおん!if 5人 + α の物語

アシッド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！if～5人＋αの物語

【Nコード】

N9656L

【作者名】

アシッド

【あらすじ】

精練高校の一年生と二年生男子が女子校の桜が丘高校にテスト生としてやってくる。一年生の連中はバカ、ハーフ、オタク、放浪好きなどと非常に濃いキャラ性。この4人と軽音部が繰り広げるもしもの世界……

※注意この小説には男子が数名登場するのでオリキャラやけいおん！に男はいらないという人は見ないことをおすすめします。
更新も遅いかもかもしれませんがどうかよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

初めての投稿なので色々ミスがあるかもしれませんが少しでも楽しんでもらえたら幸いです。

（泣）」

「・・・・・・・・なんなんだ一体？」

「・・・・・・・・なあ、死ってるか勇？」

「知るの漢字はそっちじゃないけど・・・・・・・・ドラゴンの方が死んでるね」

「だってよーーーーー隼人とディーノの奴らがよーーーーー」

「うん。抱きつかないでね、僕の心は二次元の娘だけだから」

「いだいっ！！け、蹴るなごぶっ！！」

「で・・・・・・・・僕になんの用？」

「うう・・・・・・・・昼食った焼き蕎麦パンが喉まで・・・・・・・・」

「なにもないの？なら僕の二次元理論でも聞いてもらおうかな」

「げっ！？い、いや・・・・・・・・なんでもねーよっ！ちくしょー

！・・・・・・・・！！！！みんなのばか・・・・・・・・！！！！

！！！！（泣）」

「近頃はさーライトノベルを読んでるだけで、周りの人からオタクだとかキモイとか言われがちだけど、それって酷いと思わない？ハ○ー・ポッターとかデルト○クエストはそういう対象にはされないで生徒○の一存やおまも○ひまりとかを読んできると――――」

プロローグ（後書き）

プロローグでした・・・なにがなんだかわからないと思いますが次回からはキャラ紹介も含む予定です・・・

4人のテスト生（前書き）

視点は滞からです。それではどうぞ

4人のテスト生

2月中旬

「はい、それじゃあ朝のHRを始めるわよー」

担任の先生が教室と入ると同時に雑談をしていた生徒たちが各自の席に座る。私、秋山滯も親友（悪友かも？）の田井中律と軽音部のことを話していたのでそのうちの1人だ。先生が教卓の前に立ち咳払いをして話始める。

「この間の全校集会で通達があった通り今日から桜が丘高校は男女共学になります」

クラス中が騒がしくなるがしょうがない。私だって女子高に入ったというのに急に共学になるなんて……。これから学校にいる時は男子と顔を会わせると思うと――――

「ほら秋山さん、そんなこの世の終わりみたいな顔をしないの。まだ正式な決定ではないので、近隣の高校の精練（せいれん）高校から推薦された数名の男子生徒が試しということで4月まで来るだけなんですから」

私が顔を青くしてることとで考えを読み取り、ああ言ってるのかもしれないけど……。うううー！嫌なもの嫌なんだ！

「それで一年生はこのクラス、二年生には2ー3の計二クラスがテストクラスとなっています」

なんでピンポイントに私が所属するクラスになるんだ。

「前置きが長くなりましたが私たち1ー2には4人の男子生徒がテスト生として編入してきます」

4人……。なんて不吉な人数なんだ！これは私に災いが降りかかる前兆なのか！？

「もう教室の前に待機させていますので、さっそく入ってきて貰い

ましょう」

えっ！？　ままだ心の準備が――――

「それでは1人目の人から入ってきてください」

さっきは私の心情を読み取ってくれたのに今回は読み取ってくれなかった。

「俺の名前は工藤竜！人呼んで　漆黒の竜ブラックドラゴンとは俺のことだ！」

最初の人から印象深い男の子だ。髪はそこそ長めで、漆黒の竜と言うだけあって黒い。ルックスも普通より良いと思う………かも。

「ちなみに好きな食べ物はサーロインステーキで、嫌いな食べ物は野菜！男だったらスタミナつけねーといかんからな。んで、嫌いな科目は体育以外全部！こう見えても俺の成績は一番（下から）なんだぜ！！それで趣味は――――」

「以上で工藤君の自己紹介は終わりです」

工藤………と言った男のまだ続きそうな話を強制的に終了させた。

「ええー！ー俺の熱いトークはまだまだこれからなんすよー！ー」

「そうは言いまして朝のHRは長くありませんから1人3分ぐらいでないと1時限目が始まってしまいます」

「ちえっ………でもまあしゃーないか。この続きはまた次回つつーことでヨロシク！」

ピシッと私たちに向かって敬礼する。

なんか唯に似ているなこの男………

自己紹介を終えた男は教壇から降りて、近くに置いてあったイスに座った。

足を組んでいるし、実に遠慮の知らない男だ。

最悪の第一印象だな。

「それでは次の方どうぞー」
医者のように二人目の男子生徒を呼ぶ。

今度は真面目そうな人が良いんだけど……

『わあ……』

入って来た男を見て何人かの女子は歓喜に近い声を上げた。

白銀の髪は耳と眉毛に掛かる程度の長さで肌は真っ白、180はある背に多少吊り上りの紫色の目は誰が見ても外人の血を引いているのがわかる。

たくさんの興味の視線を浴びられていてもまったく気にもせず教卓の前に立った。

「俺の名はディーノ・小杉だ。名前と外見からわかると思うが俺はドイツ人と日本人のハーフだ」

日本語凄い上手……もしかして日本で育ったのだろうか。

「はいはい、しつもん」

小杉が教壇から降りようとする前に律が席に座ったまま、挙手をした。

勇気あるな、あいつ。

「なんだ？」

「趣味とかはなにかないのか？」

「うおおおい！俺には質問とかはなくなかったか！？」

扱いの差に不備を感じたのか工藤はイスから立ち上がり憤慨するけど――

「そうだな……あえて言うなら勝負事だな」

「お？そいつは男らしいじゃん」

「無視かよ！？」

2人共完全に無視してる。

他のクラスメイトも小杉に注目してるし……あ、いじけた。隅っこでしゃがみ込みながらなんかぶつぶつ言ってる。

「もちろん賭けありのな！やっぱり何か賭けないとやる気が起きないしな！」

先生がいるのにそんなことを堂々と言っているのか。

「だよなー、賭けのない勝負ごとなんてテスト前日の時と同じくらいやる気がでないよなー」

ちよつと待て、いつも私に泣きついてくるくせになに言ってるんだ。

「お前は話がわかる奴だな！精練にいた女子は賭けなんかやってくれなかったから、お前みたいな奴に会えて嬉しいぜ。これからよろしくな」

「こっちこそよろしく。私は田井中律。律って気軽に呼んでくれていいぜ」

「ああ、よろしくな律」

真ん中の席に居た律は小杉の所に行き握手をした。

馴染むのはやつ！

私には到底できない……………

「俺とディーノとのこの扱いの差はなに……………？」

「お前は初対面からギアを全快にしすぎなんだよ」

「……………俺とお前の紹介はたいして変わらないと……………」

「

「……………キャラ性じゃないか？」

「……………しくしく」

「泣くなよ……………」

3人目の人はどんな人だろう？前の2人は色々濃いやつたちだから次こそは普通の人だと……………いいな。

ガラッ

扉を開け入ってきた男は……………小さい顔に他の2人と比べ少

し背が低く（160センチくらいか？）目と後ろ首に掛かるくらいの黒い髪、第一印象は優しい男の子だ。

「初めまして、僕は藤宮勇氣ふじみやゆうきです。短い期間だと思いますがどうかよろしく願います」

す凄く真面目な男の子だ！うん！やっぱり1人はこういう人がいないと！

『趣味はなにかあるんですか？』

クラスメイトの女の子が藤宮に興味のことを聞く。

「やうだね・・・アニメ観賞かな」

・・・アニメ観賞？

「うん。やっぱり日本のアニメは最高だよなー萌え系アニメはもちろん戦闘物やロボット物のアニメはクオリティが高い！今僕がお勧めするアニメはエンジェ○ビーツだね。製作したのが僕の好きなメーカーのK○yだし、グラフィックとシナリオライターの人のも僕の好きな人だからなー見てるだけでテンション上がっちゃうよ。あ、もしかして僕がアニメしか見ないと思ってる？甘いなーそんなわけないよ。僕の家には気に入ったアニメ、漫画、ゲームのキャラのグッズがたくさんあるし、同人誌やゲームだってあるんだよー！これら全てはお宝さっ！いや、家宝と言っても過言ではないねっ！あ、ちなみにね同人誌って言うのはね――――」

「ストーーーーーッップ！！！」

藤宮のなんだか良くわからない話を工藤と小杉が止めに入った。

さっきの話の半分も理解できなかった。

この人は普通そうだと思ったのに・・・

「むーなにさ、まだ僕のターンは終わってないよ」

「終わらせろよ！お前のアニメの話は毎回長いんだよ！修学旅行の夜なんか5時間も語りやがって、おかげでその次の日は寝不足で何をしたのか全然覚えてなかったんだからな！！」

「しかも語った本人は元気に観光していたという・・・」

「当然だよ。休日は9時から夜が明けるまでアニメとか見てるんだ

から」

「「威張れることか!!!」」

……まともなのは誰もいないのか？

時間も少なくなってきたので藤宮の話は強制的に終了。工藤と小杉が両手を押さえて教室の端っこに連行していった。

「それでは最後の人いいですよー」

先生が許可を出すと同時に扉が開き最後のテスト生が入ってきた。

「猪狩隼人。好きな食べ物はガム、ウ○ダー、カレー。趣味は……
……色々？」

素早く移動して自己紹介をする猪狩。

ギザギザの蒼い前髪と闇色の目が特徴的だ。

身長もそこそこ高いし顔立ちも整っていて、ほとんどの女の子がカッコいいと言う様なルックスだ…….と思う。

でも、なんで自分の紹介なのに疑問形なんだ？

「ま、ここにいるクラスの半分は急な共学化で戸惑っているのかもしれないけれど、仲良くしてくれたら嬉しい」
そう笑顔で締めくくる。

ドキッ

なんだ今のは？あいつの笑顔が妙に頭に残る…….って、
なにを考えているんだ私は…….

4人のテスト生（後書き）

竜「第1回」

デ「オリキャラ同士でーーーー」

竜&mp;デ「雑談大会ーーーーー!!!」

勇&mp;隼「イエーッ！」

竜「さあ、始めました。初の登場で皆様盛り上がっている様子です。司会は全国の女性のアイドル漆黒の竜こと工藤竜でお送りいたします」

勇「あーーーー1人だけずるいぞーーーー」

竜「うるさい!! お前らの自己紹介だけまともな反応だったくせに！俺なんて……俺なんて……ッ！」

隼「自業自得じゃん。というか勇氣のも結構アレだったと思うんだけど……」

勇「なにを言ってるのさ、ただ僕はありのままの自分を語っただけだよ」

デ「その自然体が問題なんだがな……」

竜「ええーーーーい！司会を無視するんじゃないーーーー!!!」

隼「それじゃあ、今回はオリキャラ……つまり俺たち4人のプロフィールを公開するよ」

竜「あ！コラ勝手に！」

勇「じゃあ今日はここまで。帰って貯まっていたアニメを消化しないとねーーーー♪」

竜「ちょ……!」

デ「ここから下がプロフィールだ」

猪狩隼人

16歳

誕生日 10月10日

身長 177センチ、体重 54キロ

好きな食べ物 ガム、ウ○ダー、カレー

嫌いな食べ物 食べれないもの

趣味 旅行（学校を無断欠席してまで行く） ギターを弾くこと

特技 ガムでフーセン作り

備考 本作の主人公。頭脳明晰で人間離れた運動神経を持つが自分の気分しだいで行動することが多い。独り暮らしをしていて両親は他界。そのため生活費を稼ぐために休日は色々な所でバイトをしている。竜達とは中学からの親友（悪友）で他の人からの人望も高い。旅行帰りにはお土産なども買ってきてくれるので気前もいい。上記にも記しているとおり独学でギターを弾くが腕前は抜群。精練高校ではバンドを組んでいて、なぜかボーカルとベースをやっていた。部活は無所属。

工藤竜

16歳

誕生日 7月18日

身長 179センチ 体重 63キロ

好きな食べ物 サーロイン、焼肉、ビーフステーキ

嫌いな食べ物 野菜、ゴーヤ

趣味 楽しい、面白い事ならなんでも

特技 目を開けたまま寝る事

備考 一言でまとめるとバカ。バカだが明るい性格なので知人や友人は多い。女友達も多いいが友達止まりである。あだ名はドラゴンと呼ぶ人もいる（勇気とか）漆黒の竜というわけのわからない称号を付けているのは勇気の影響。を成績は常に一番（下から）体を動かす事が大好き。肉など脂っこい物が好物で野菜を食わないがその分運動してるので太らない。音楽に関しては全くの無知。隼人達の

バンドは雑用係として手伝っていた。部活は野球部に所属していた。

ディーノ・小杉

16歳

誕生日9月6日

身長 185センチ 体重 68キロ

好きな食べ物 蕎麦、寿司

嫌いな食べ物 キノコ（過去に笑い苺を食べたことがあるため）

趣味 読書

特技 素手でコンクリートの壁を壊せる

備考 クールな性格でこの4人の突っ込み役が多い。竜とは幼稚園児からの幼馴染で一緒にバカな事を手伝ったりと普段とは違う面も見せたりする。頭の回転も速く運動能力も小杉と同じくらいに高い。ドイツで生まれ、3歳頃には日本で家族と生活して今に至る。現在は家族で暮らしていた一軒屋に妹と一緒に住んでいる。両親はドイツにで働いている。武道家で喧嘩も強い。隼人とバンドを組んでいて、ギターを弾いていた（本当はベースだが）腕はそこそこ。

藤宮勇気

16歳

誕生日4月12日

身長 159センチ 体重 49キロ

好きな食べ物 二次元の女の子の手料理（食べたことはない）

嫌いな食べ物 脂っこい料理

趣味 アニメ観賞、PC、ギャルゲー、同人誌作り&mp、観賞、

アニメキャラなどのグッズ集め

特技 超高速でブラインドタッチ アニメキャラなどの名台詞を一言一句間違えずに言える。

備考 オタク。それしか言いようがないくらいにオープンなオタク。可愛い顔をしていて女子の人気も高いのだが、本人はまったく興味がなく二次元に命を注いでいる。両親からは趣味の事は認められているが、家が洋菓子屋なのでその手伝いをやらされたりしている。洋菓子屋は結構繁盛していて女性に人気があり、隼人たちも時々ただ食いをしに来る。完全なインドア派で運動は大の苦手だが、アニメキャラの台詞を覚えられることもあって頭は良い。ただし将来の夢は二次元の世界に行く事と後先が非常に不安である・・・

**確保!!!
(前書き)**

けいおん！キャラは登場しませんので飛ばしていただいても問題ないと思います

確保!!!!

side 猪狩隼人

「それでは貴方たちの席はあそこです」

「一番後ろで窓側か、ベストポジションじゃねーか俺が一番後ろねー!」

「あ、僕だって後ろがいいんだから!」

「ヘッ、早いもん勝ちだぜ!」

竜と勇気はすぐに席に向かって行ったが俺とディーノはゆっくりと歩きながら小声で会話とアイコンタクトを交わす。

「(後ろで端の席か、どう思うディーノ?)」

「(ぼそぼそ)やはり警戒されているんだろな」

「(うーんでもそれだけじゃないと思うんだよね。さっきから好機の視線を感じるし)」

「.....視線なんて感じられるのか」

「(まーね)」

今日から授業か.....鬱だ。

一時限目 数学?

「ZZZZZZZZZZ」

後ろで爆睡している 竜^{ばか}。

授業が始まったと共にすぐに夢の世界へ旅立ちやがった。

「それではここの問いを——」

さっきからあの先生こっちはかりを.....正確には寝ている竜ばかり見ているな。

これは当てられるか?

「そこの寝ている貴方! 工藤さんにやってもらいます」

あーあ、当てられた。

「ZZZZZZZZZZ……わーい……そこのおねーさん……俺と良い事しなーい？」

しかも教室でなんて夢を見ているんだこの男は。

「……おい起きろこのバカ」

竜の隣の席のディーノがノートの切れ端を千切って投げる。

「むにゃ？……もう授業終わったのか？」

「違う違う、前前」

俺の隣の勇気がジェスチャーで伝える。

「へ？前？」

「くっどっうさっくん!!」

完全にご立腹な様子。

初の授業で先生を怒らすとは流石だ。

「えー……なんでしょうか」

「なんでしょうかじゃありません!! さっさとこの問題を解きなさい!!」

「えーっと正四面体ABCDの辺BCの中点をMとする時 $\angle AMD$

$\parallel a$ として $\cos a$ の値を求めよ……」

高校生のLVだと中堅くらいか。

だけど、竜に解けるはずは———

「……(汗)」

ないな。

体全身から汗を噴き出してるし。

ピッチャー工藤竜! 9回裏2死満塁一店差の大ピンチ!!

「寝ていたってことはこの問題も解けるといことなんですよね？」

「……(汗汗)」

しかも相手バッターは4番! 本日の結果は4打数3安打の2打点!

! さーあどうする! ?

「さあ、どうなんですか？」

なんて実況してる場合じゃないか、しよーがない助けてやるか。

サラサラっと。

ほい、パス。

先生に気づかれない様に竜の席に答えを書み丸めた紙を投げる。

「(やばい……全然わかんねえ！つーかこすってなんだよ！？デイナーの苗字から由来されたのか！？ってん？隼人の席からなにか……これはおっ！」

「わからないのですか！？」

相当痺れを切らしているな。

なんか女子たちも俺たちを咎める様に見てきてるし。

いや、俺たちはなにも悪くないんだけど……

「答えはC O S a ∥ 3分の1 ッス」

「……せ、正解です」

答えられるとは思っていなかったのか驚いている。

「ふっふーん。これが俺の実力ッスよ先生」

なんでお前が威張るんだ。

俺の解答を読んだけなのに。

「授業中に寝ていたので当てたんですから、次は寝ない様に努力する様に」

「うーっす」

注意しても竜には無駄だと思いますよ先生。

「(サンキュー隼人。助かったぜ)」

先生が背中を向け板書し始めると、顔は黒板に向けながら小声で礼を言ってくる。

「小声 (今回はサービスだから。次からは何か奢ってもらうから)」

「(心配無用。俺は2度同じミスはしないのさ)」

「(その台詞を言ってみただけだろ)」

毎度同じ失敗をしてるくせに。

「ッシャー、授業終わりィ！飯だ飯ー！」

精練の時の学校指定の鞆からコンビニで買ってきたらしき飯を取り出す竜。

4時限目の終了のチャイムがなったと同時に起きたのはもう習慣としか言えない。

一時限目の時はあんなこと言っていたのに今となっては完全に忘れてるし。

「……………いつものことだから慣れたけど。」

「それにしてもドラゴンは良く寝てたよねー。いびきが教室中に響いていたよ」

ドラゴンというのは勇気が竜を呼ぶときのあだ名だ。

なぜかは……………言わなくてもわかると思う。

「なにー！この全世界のイケメン男の俺がいびきを掻くわけねーだろ！」

「普通に掻いていたぞ」

「全世界は言いますぎ」

ディーノとの連携突っ込み。

これもいつもの風景だ。

「にしても、隼人の飯はなんだそりゃ？」

「ガム」

「それは昼飯とは言わないよ……………」

「相変わらず寂しい食事だな」

「ほっといてくれ」

3人から痛い指摘をされた。

しょうがないじゃん、金欠なんだし。

「んで、勇とディーノは弁当か。これもいつも通りだな」

2人は基本弁当だけど、中身は全くもって正反对なんだよな。

「勇気は海苔弁とビワタルトか。ビワタルトは店の残り物？」

勇気の家は洋菓子屋だから、昨日の売れ残った物は弁当のおかず？として入れられていることが多い。

海苔弁の方は完全に手抜きということがわかる。

「売れ残りを入れるのは別に良いんだけど、毎回海苔弁は勘弁して欲しいよ。リアル母はわかってないよ……」

「確かに俺だったら毎度海苔弁だけなら激怒するな。肉を入れるー
ーってな」

「お前は肉しか食ってないから、バカなんだろう」
ディーン……そういう事は思っても口にしちゃだめだろ。

「なんだとてめえ、野菜は食わないで肉ばっか食ってるから頭に栄養は回っていないで、筋肉ばっかし付いてやがる。悔しかったら自己再生でもして環境問題に貢献しろと言いたいのか!? ああん!?!」
出た! 精練高校の名物、漆黒の竜の言い掛かり!!

「そこまでは言っていないが……似たような物だ」
肯定した!

「それと自己再生じゃなくて光合成だよ」
しかも間違えていた!!

「うるせー……!」
学校は変わっていても、騒がしいことは変わりなかった。

放課後になったが、帰りもせず俺の席を3人で囲んで駄弁っている時、竜があることを言い出した。

「んで、隼人は部活に入るのか?」

「うーん……入ろうとは思ってるんだけどね、まだ考え中。そういうお前は?」

まだ考えてないんだよな、女子高だから色々と限定されるだろうし。
「俺か? 俺は野球部があったら迷わず野球部にするけど、あるわけないしなー」

「女子高だからな。竜の言う通りあるはずがない」
仰る通りで。

「そうだ! だったら俺たち4人で新生野球部を作ろうぜ! なかったら作ってみようアホウドリだ!」

さすがバカ、俺たちの想像を超える考えを思いつくとは。

「無茶いうな、4人で野球ができるわけないだろうが。それに、この学校の男子の総計は2桁にも満たないんだからな」

「それにアホウドリじゃなくて、ホトトギスな」

「僕にスポーツをやれと言うなんて……死んでも文句は言えないよね？」

俺たち3人の大反対?に「そこまで言わなくてもいいじゃないか……」

今日で2回目の自虐モードだ。

「ディーノと勇気はやっぱり部活には入らないのか？」

竜が戦闘不能になっているので俺が2人に問う。

といっても、結果はわかるんだけどさ。

「愚問だね。精練の時はアニメ・ゲーム研究会があったから入っていたけど、桜が丘にはないだろうしね」

「俺はバイトがあるからな。部活などに 現（うつ）つ をぬかすわけにはいかない」

変な回答とクールな回答どうもありがとう。

「勇は帰ってアニメ観賞でディーノは愛しの妹のために部活には入部しないなんて、健気だねー」

ひんしの状態から回復したみたいだ。

健気の意味わかって使ってるのか？

……わかってないだろうな。

「うん。部活には入らない分僕は趣味に費やすことができるからね、この前録画したれ○い×ばとを早く消化しないとね。あ、れで○×ばとって言うのはね——」

やばい！勇気が語り始めようとしてる！！

「で、ディーノは可愛い妹ちゃんのためにバイトするんだろ？バイト先は決まってるのか？」

ナイスフォロー！

勇気が出鼻を挫かれたから、不機嫌そうだけど気にしない。

「無論だ。今度は駅前の喫茶店で働く予定だ」

「アレグロアだっけ？あそこ倍率高かった気がする」

俺も行ったことあるけど、中々の味だったな。

「ああ。高かったが実力で合格した。時給は1040円と高い」

「そりゃすごいわ。俺もそこでバイトしてーな」

俺には無理だろと言おうと思ったけどやめた。

辛い現実を突きつけたら可愛そうだしな。

「だいぶ話が逸れたけど、隼人は何部に入部するのさ」

「運動部か？」

「女子高だから入っても女子ばかりだし、部活を発足するにしても顧問とか必要になるだろうし運動部は無理だな」

でも、部活には入りたいとは思っているんだけどな、やっぱり学園生活は楽しみたいしさ。

「そういやさ、精練にいた時はディーノたちとバンド組んでいたじやねーか。吹奏楽部にしたらどうだ？ベースはすんげー上手かったし、ボーカルも兼任してたじゃん」

こいつは……音楽に坎んしてはまったくダメだな。

……勉強もダメだけど。

「あのな……俺は元々ギター専門なんだぞ？あの時はなんとなくベースをやってみただけだし、吹奏楽にはギター専門は普通いないし、ボーカルなんていたら最早吹奏楽部じゃないぞ」

「え？そーなのか？」

「当たり前だ！そんなぐらいは知っとけバカ！」

「あー！バカって言ったな！！バカって言った奴がバカなんだぞ、このバカ！！」

「お前だけには言われたくない！！だったらお前もバカって言うるならお前だってバカなんだろうが！」

「え……あれ？そうなのか？」

「……もういい」

ダメだ……こいつはバカを超えるバカだ……こい

つの称号は『自分で言っておいて、訳がわからなくなるバカ』にしよう。

ディーンはこいつと幼馴染で今日まで突っ込んで来たのか……

・尊敬に値する……

「それで？吹奏楽部が嫌なら、何部にするの？」

振り出しに戻ってきたよ。

何回目だ？

「まあ、音楽部か軽音部があれば入ってもいいんだけど――」

「ふっふっふ」

「えん？」

1人の女子生徒が不気味に笑いながら登場して――

「確保——！！！」

「ぎやー！？」

網で捕られました。

確保!!!! (後書き)

竜「第2回」

デ「オリキャラ同士でーーーー」

竜&mp;デ「雑談大会ーーーーー!!!!」

勇&mp;隼「イエーッ!」

竜「さあ第2回目が始まりました。参加者の状態はハイテンションの様子。今にも暴れだしそうです。おっと、挨拶が送れませんでしたね。私はこの企画の司会をさせていただいている、神にも劣らない美貌と運動能力と頭脳を持つーーーー」

隼「くらえメガトンシュートオオオオオ!!」

竜「あがあっ!?こ、後頭部に凄まじい激痛が・・・・・・!」

勇「話が長いぞーーーーこのヘタレ司会者」

竜「な、なんだと!?この俺の何処がヘタレだというんだ!!」

デ「存在自体だろ」

竜「俺の生き様全否定!?!」

隼「そんなことより早くサッカーの続きやろーぜ」

デ「うむ、そうするか」

勇「ウイニン○イレブンだったら誰にも負けないのになあ」

竜「無視すんな!!そして、そんなことか言うな!!お前らなんで今日俺らが集められたのか知っているのか!?!」

隼「え?サッカーをするためじゃないの?」

竜「違う!サッカーならいつでも出来るだろ!!」

デ「クイズ大会じゃないのか?」

竜「違う!!ゲーセンにでも行ってろ!!」

勇「違うよ2人共。今日は僕がオススメするアニメの上映会をするためーーーー」

竜「んなわけあるかあ!!今日俺らが集まった理由はーーーー」
3人「「理由は?」」

竜「・・・・・・・・ん？なんだっけ？」

隼「ギガトンシュート!!!!」

竜「ほごああ!!鼻が・・・・陥没するような痛みが・・・・がくっ」

隼「それじゃ、サッカーの続きやろーぜー」

勇&デ「「おおー」」

2時間後

竜「う・・・・・・・・ん？俺は・・・・あれ？そうか、俺は隼人が蹴ったボールが俺の顔面に当たって・・・・ん？ディーノたちは？照明も切れてるし・・・・あ!？外側から鍵がかかってやがる!まさかあいつらがかけていったのか!？どーすんだ!内側からドアの鍵をあけるには鍵が必要だし、携帯なんて家に置きざりにしたままだし・・・・・・・・」

もしかして・・・・・・・・脱出手段は・・・・・・・・なし?・・・・・・・・・・・・・・・・あいつら・・・・・・・・!!覚えていろよ・・・・・・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9656/>

けいおん!if 5人+αの物語

2010年10月10日06時56分発行